
エンジニア（精製士）の憂鬱

蒼衣翼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エンジニア（精製士）の憂鬱

【Nコード】

N2006Z

【作者名】

蒼衣翼

【あらすじ】

現代日本に良く似た、しかし魔物が跳梁跋扈し、ダンジョンが発生し、魔法が飛び交う、そんな世界に生きる、手に職を持った特殊職サラリーマンの男が、踏んだり蹴ったりしながら送る人生模様。短編作品：エンジニア（精製士）の里帰り<http://nccode.syosetu.com/n3215y/>を長編に起こした作品です。純粹に続きでもありますが、別に前作を読まなくても問題はありません。

1、友人は時に敵である

「そりゃあ、大変だったな」

カランと、いかにもな音を立ててデカイ氷の入った蒸留酒精硝子ウイスキー杯グラを回しながら、流ながれは俺の苦勞話をそう一言で片付けた。

別に大げさなねぎらいを期待していた訳でもないし、そういう間柄でもないのです、俺的にもそのぐらいが丁度良い。

「大変だったよ、もう田舎には二度と帰らねえ」

今年の初め、ぶつちやけて言うと言正月休みに、俺は実家の両親の「成人祝いをしてやる」との甘言を真に受けて、ノコノコと数年前に飛び出してそれ以降帰ってなかった田舎の実家に里帰りした。

成人といっても社会的な成人である二十歳の祝いではなく、“ど田舎の故郷ならではの独特な感覚での成人”イコール一人前の事だ。

俺は今年二十六歳になる。社会的には立派に自立した大人ではあるが、故郷的な考えからすれば、一人立ちして自分の能力だけで生活を切り盛り出来るようになる事が成人の証なのである。

まあ他にも色々、田舎ならではの条件はあるが、家から自立して生計を立てていた俺は、当然既にその辺の条件はクリアしたと思っていたし、「いい相手がいるんだ」との親の言葉に、てつきり嫁の世話をしやろうと思いついたんだと思いついて、その手の出会いに縁が無かった焦りも手伝って、つい、喜んで飛び付いてしまった。

そして、帰ってみれば、

『いくらなんでもそろそろ証を立てねばならんだろ』

『まあ、行つて来い』

という、軽い言葉と共に幻想地図バーチャルマップに突っ込まれて鬼と戦う羽目になったのだつた。

しかも古典的な条件達成式開放錠が掛かっていて、その鬼を倒さないと出られないという非道な代物だつたのである。

「しかし、鬼を調伏する家系とは聞いていたが、未だにそんな因習があるんだな」

「田舎は時間が止まつてるからなあ」

なにしろ未だに天然ダンジョンが存在し、いや、それどころかちよくちよく発生すらしているような辺境なのだ。

うん、今回の帰郷の時も思いつきり迷い込みましたよ。なんかちよつと遠い目になりそうになるが、もう大人だからね、泣いたりしません。

そついやガキの頃も、なぜかしょつちゆうダンジョンに突っ込んでたなあ。

俺が泣きながら大なめくじスライムを殴つてると、決まつてお袋が魔除け灯を掲げて迎えに来てくれたもんだ。

「家族つてのはどうしてだか、みんなが同じように家族の一員である事にやたらと拘るからなあ」

流もしみじみと洩らす。

こいつの家族もこいつの今の仕事には大いに不満があるらしい。博士号を持ち、うちでも特に高給取りなのだが、元々国を動かす

立場の一族なのだそうで、こいつのやってる仕事など下賤なものにしか思えないらしい。

家格の違いというやつか、恐ろしい話ではある。

俺とこいつが仲良くなったのも、全く逆の家柄ではあるが、家族から今の職場で働く事を反対されているという一点で立場が共通しているのがきっかけだった。

「一応憲法で職業選択の自由が保証されているんだから好きにさせてるってんだ」

「正にその通りだ。時代錯誤も甚だしい」

二人で家族へのレジスタンス魂を盛り上げていると、流の傍らに女性が一人近付いた。

「なあに？難しいお話？男二人で鬨めっ面してないで、一緒に楽しめいお酒を飲みましょうよ」

隣の店の人気ホステスのミキちゃんだ。

流はあちこちの店に顔が利き、しかもモテモテで、あまり二人だけでじっくり飲んでいたりすると一定時間でこういう風に牽制が入る。

「どうやらこの店にいる事がさっそくバレてお迎えが来てしまったらしい。」

「ああ、後で顔出しするからあっちで待っていてくれ、ママさんによろしく言っておいて」

「はあい。お邪魔しました」

可愛らしい仕草でペコリと頭を下げると、俺とマスターにも一礼して戻る。

彼女は軽いようできてこういう細かい所で礼儀を忘れないので人気があるのだ。

ここで俺に対して舌を出したりあからさまな態度を取る女の子は、夜の世界では一流にはなれない。

まあどうでも良い話だけだな。

「相変わらずモテモテで羨ましいよ。夜の帝王って感じだな」

あれ？なんかこう、胸の奥からどす黒いモノが湧いてくるよ。イケメンで金持ちで家柄良し、改めて考えるとムカツク男なのだ、こいつは。

なんだ、同じ境遇とか俺の勘違いじゃね？イケメンは滅びれば良いのに。

実際、流は男の俺から見ても文句の付け所の無いイケメンだ。付け焼刃じゃ身に付かない洗練された挙動、いかにも上流貴族らしい上品でありながら男らしい顔立ち、特権階級を表す一部色変わりの髪も玉の輿狙いの女にはたまらないだろう。

「馬鹿言うな、これで色々と苦労も多いのさ。行く店や遊ぶ女の子に偏りが出ると恨まれかねないからね」

うん、そうだね。イケメン爆発しろ。

「へえ」

俺の嫉妬の炎が酒と共に臍腑を焼く。

そんな俺の気持ちを知ってか知らずか（いや、知るまい、こいつなんだかんだといってお坊ちゃまだからな）流は、ふと思いついた

ように話を変えた。

「そうそう、こないだ言った、調整を頼みたい物なんだけど」

言いながら腕から外したそれは、俺も先程から気になってた物だ。

おおお、カタログやテレビジョンとかじゃなくてナマの本物を初めて見たぜ！

それはゴツイ造りの時計ウォッチだった。

もうほとんど装具ブレスレットに限りなく近い見掛けだが、中身は精度世界一を誇るゲルマン帝国の「シン」ブランドだ。

この会社は創立者が空軍パイロットだった事もあって精度や機能性を追求したゴツイモデルばかり作っていたメーカーだったが、最近やや装飾を加味したデザイン時計を作り始め、その最新タイプがこれのはずだ。

装飾といっても華美な物ではなく、あくまでもいぶし銀の本来のブランド的な魅力を捨てていない実用的な物で、なにより重要なのはその装飾部分の機能である。

なんと、アタックサバイブと呼ばれる最新の防衛術が施されていて、装着者に突然の物理的危機が生じた場合、瞬間的に展開してそれを守るといふセーフティ機能なのだ。

流石現役ミリタリーウォッチの面目躍如といった所だ。

「ん？これ」

以前カタログで見たのと色合いが微妙に違う。もしかして密かにオーダー品なんじゃないか？

流にその皆を聞くと、「いや、プレゼントだから良く分からない」と返された。

イケメンと金持ちを併せ持つ友人に思わず呪詛を掛ける所だった。危ない。

まあいい、おかげでこんな凄い時計を分解出来るんだ。それで相殺しておこう。

「隆、お前なんか時々怖いぞ」

「顔が怖いのは生まれつきだ、ほっとけ」

「いやいや、そうじゃないから。それに別に怖くないし。こないだの店のユキちゃんなんか『野性的で素敵なお友達ね』って言ったぞ」

なんだと……いや、無駄な期待は止すんだ俺。ユキちゃんはきつと、将を射んと欲すれば先ず馬を射よとの諺通り、こいつを落とすのに周りから攻めただけなんだ、期待すればきつと傷付く、……でも、ちよつと今度ユキちゃんのいる店に顔見せてみるかな。

「うん、じゃあ、いつものように調整しとく。愚痴を聞いてくれてサンキュ」

「ああ、もう帰るのか？お前いつも早いよな。もしかして家に同棲中の彼女とか？」

「いる訳無いだろ！ポケエ！」

「アハハ、じゃあ、また明日職場で。お疲れさまでした」

「せつかく浮世離れた場所に来てるのに仕事の挨拶とか、ちよつ

と空気読めよ、お前」

「よく言われるよ。どうも切り替えが苦手な質でね」

「顔は派手なのにワーキングホリックだよな、大概」

「派手は余計だ。お前だって趣味と仕事の線引きが出来無いくせに」

「むっ、俺は楽しんでるから良いんだよ」

ほどほどの酔いを楽しみながら夜道を歩いて帰る。

そこかしこの暗闇には薄い邪気がたゆついているが、それはちょっと『暗い』だけで実害が有る訳じゃないので安心だ。田舎とは大違いである。

なにしろ大都市には全て大掛かりな結界が張られているので、人に悪さをするような凶悪な怪異マカモは入り込めないのだ。

偶に精神が不安定な輩がそんな薄い邪気でも引つ掛かって事件を起こしたりしているが、そんなものは優秀な警察がなんとかしてくれる。俺はのんきな一般人、無力な都民なのだ。

うん、やっぱり中央は良いな、都会万歳！田舎は俺には合わないんだよ！

「もう田舎にや帰らねえからなあ！！」

明々とした街灯に霞む夜空に思いつきり叫ぶ。

もちろん都会であるからには周囲には人がいる。うん、思いつきり見られてるな。

とりあえず怒られる前にさっさと帰るか。

あちこちの店から流れ出している流行りの歌をなんとなく口ずさ
みながら、俺は狭いながらも楽しい我が家へと帰路を急ぐのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2006z/>

エンジニア（精製士）の憂鬱

2011年12月7日06時47分発行